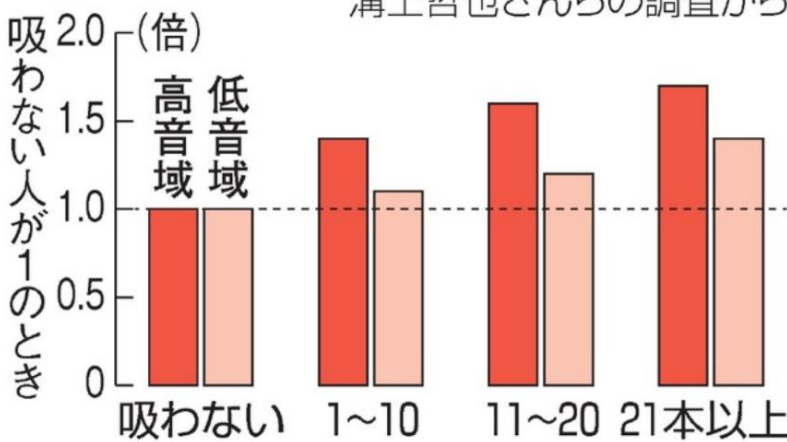


タバコは身体のさまざまなところに悪影響を与えます。これまでも、その影響で発症するいろいろな病気を紹介してきたので、皆さんはよく知っていると思います。COPD、心筋梗塞、脳梗塞などはその代表ですが、じつは耳の機能もダメージを受け聴力が低下する事があるのです。

下記のグラフは国立国際医療研究センターが行った、20歳～64歳までの約5万人健康診断データをもとに喫煙年数を含めた追跡調査をした結果です。一日21本以上の喫煙者は“聞こえにくさ”が

**たばこを吸う本数と聴力低下のなりやすさ**

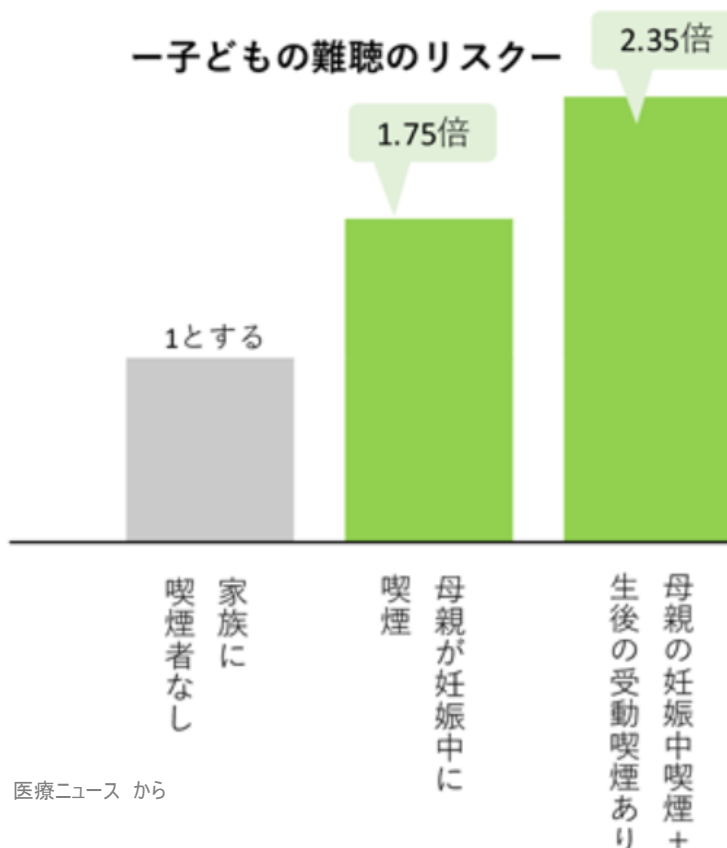
溝上哲也さんらの調査から



朝日新聞 DIGITAL から

**妊娠期喫煙および受動喫煙の影響**

—子どもの難聴のリスク—



医療ニュース から

吸わない人の1.5倍になっています。これは、タバコに含まれるニコチンの毒性や血流の悪化などがもとで内耳の細胞の働きが悪くなるからだと推定されています。

また京都大学の研究では、妊娠期の喫煙と出生後の受動喫煙が子どもの聴覚発達に影響があるという報告がされています。左のグラフにあるように母親が妊娠中に喫煙すると、その子どもが聴覚障害を疑われる頻度が喫煙者のいない家族に比べて1.75倍も多くなるとしています。そして、出生後も受動喫煙を受けるとその頻度は2.35倍にもなると発表されているのです。

いかかでしょうか。タバコを吸い続けると“聞こえにくくなる”可能性があるなんて初めて知った人が多いと思います。こんな害もあるのですから、タバコはまさに「百害あって一利なし」のことわざがぴったりです。

産業デザイン科 奥田恭久